

薄桃色のとばりの中で



クラブのクイーンはやっと立っていた。頬は焼けつくように熱かった。足元もおぼつかなくなった時、薄桃色のとばりの中に招かれた。しつらえてある真っ白な寝台に身を横たえた。身に着けていた寝間着のまま、力が抜けて、抜け殻のように、寝台に、全身を預けた。狭いながらも、柔らかい薄桃色の、静かなとばりの中には、クイーン一人。安堵の吐息をつく。右手首には、刻印をおされ、整然と並んだ丸い穴のついた腕輪が気づかぬうちにしっかりとめられていた。



目を上にあげると、透明な冷たい秘薬が掲げられている。一滴、一滴、熱に火照った体に、与えられる。右手に、明るく灯された薄桃色のとばりがあった。その中で、ダイヤのクイーンが横たわって、時折短く呻き声をたて、耐えている様子が窺えた。彼女の前に、スペードのクイーンのとばりもあった。



スペードのクイーンは鋭く怒りのこもったような、激しい手さばきですべてを動かしていた。それは痛みのためとしか言いようがなかった。前方の左手のとばりからは聞こえないほどかすかな吐息が感じられた。静かに穏やかに身じろぎもせず横たわるハートのクイーンのようなようだった。それぞれのとばりのクイーンのために、清らかな若い女性がそっととばりを開けて入って来て、滑らかな手を差し伸べて、優しい声をかけてくれた。このまま、しばらく、じっと…それが最初の夜だった。



今、私はエルミタージュに帰ってきています。秋冷の候となり、芝生に落ち葉が散っていて、櫂の赤い葉が青空に見事なコントラストを見せています。ベランダから遠望できる富士山は朝日を受けては冠雪の姿でオハヨウト、夕日が沈むころには紫色のくっきりとした姿でオヤスミナサイを告げてくれます。エルミタージュの安らぎの中でホッとしながら毎日を迎えています。

30日の夜に、石川町の横浜中央病院まで、急いで行く用がありました。車をパーキングに入れて、別にもう急ぐ必要もなかったのに、つい病院の玄関まで走りました。その時、私は自分がすでに「鈍くさい亀」になっていたことを忘れ、昔のままの「ピーターラビット」の気分で駆け出したのです。病院の車寄せでバツリ倒れました。しばらく驚きと痛みで動けません。顔がブレーキになったのか、右頬に擦過傷、打撲を受けて、血だらけになりました。幸い病院の真ん前でしたから、処置をしてもらいました。それから数日間通院しましたが、顔は腫れ、熱、痛みがどんどん増します。とうとう耐え切れずに、エルミタージュの目の前の南部病院に息子に車を出してもらい、緊急で入りました。そして即入院という事態になったのです。その夜の幻は、安堵の思いと辛さが混じっていました。

私の病名は最初は蜂窩織炎ということで、傷からばい菌が入ったようでしたが、更に、弱り目に祟り目で、帯状疱疹も発症し、首筋から、耳に向かって、腫れと熱が出てきました。お医者さんは心配させまいと、いつも優しく見てくれて、「抗生物質で叩きましょう」と力強い言葉で励ましてくれました。8日間の入院生活で、平熱に戻り、ほぼ腫れも引きました。まだ顔に擦過傷の傷跡が赤く濡れて残っています。歳を考えると夫、優しい嫁に支えられて、しばらくは静かにいたしましょうか。